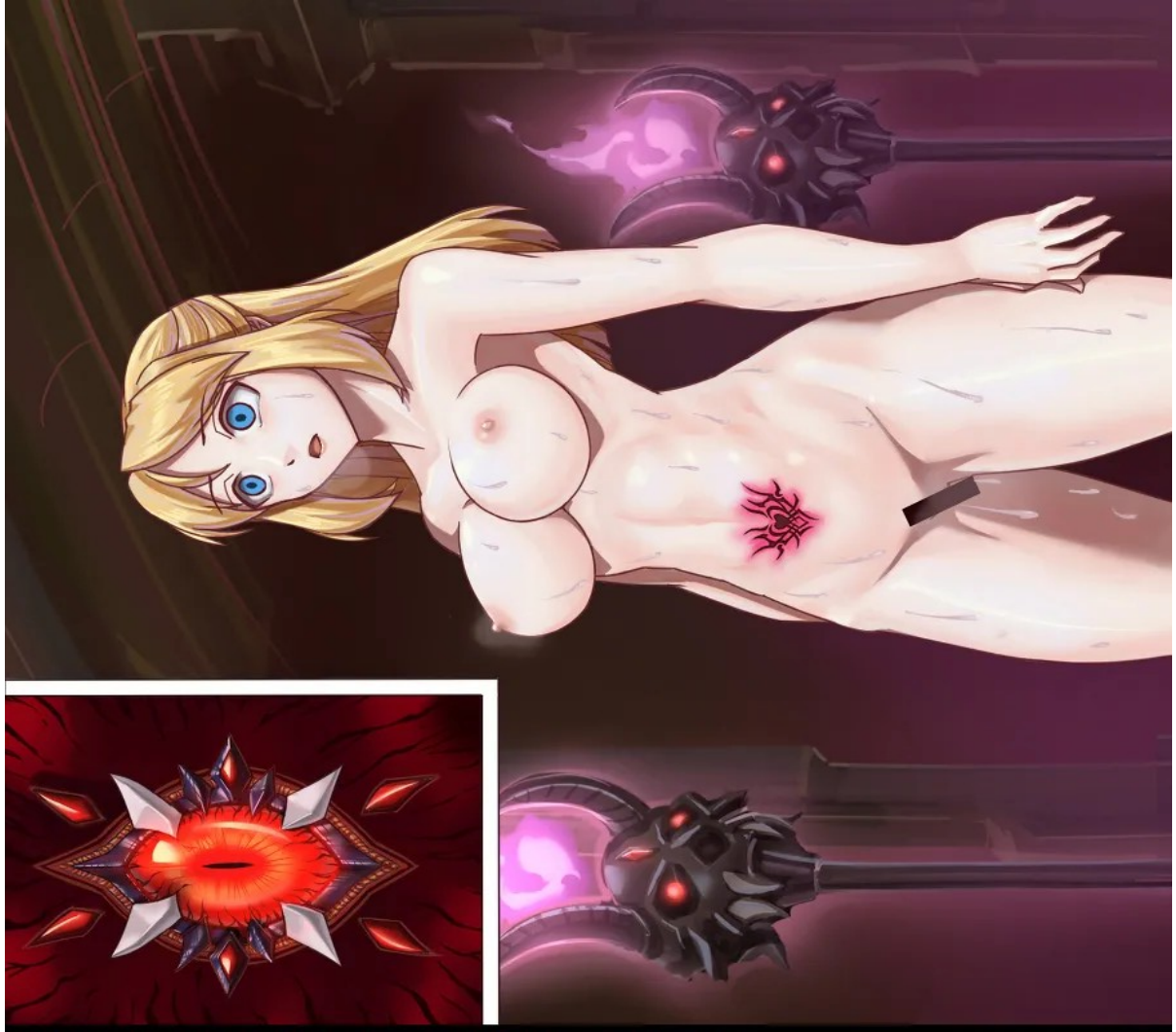
「仲間を逃げるため，一人でわしを挑むはいい度胸だな，娘よ。」
「…私を殺しなさい！」
「ククク…そうはいかないよ。もっと面白いものに見せろ…」
「例えば…この邪眼！」

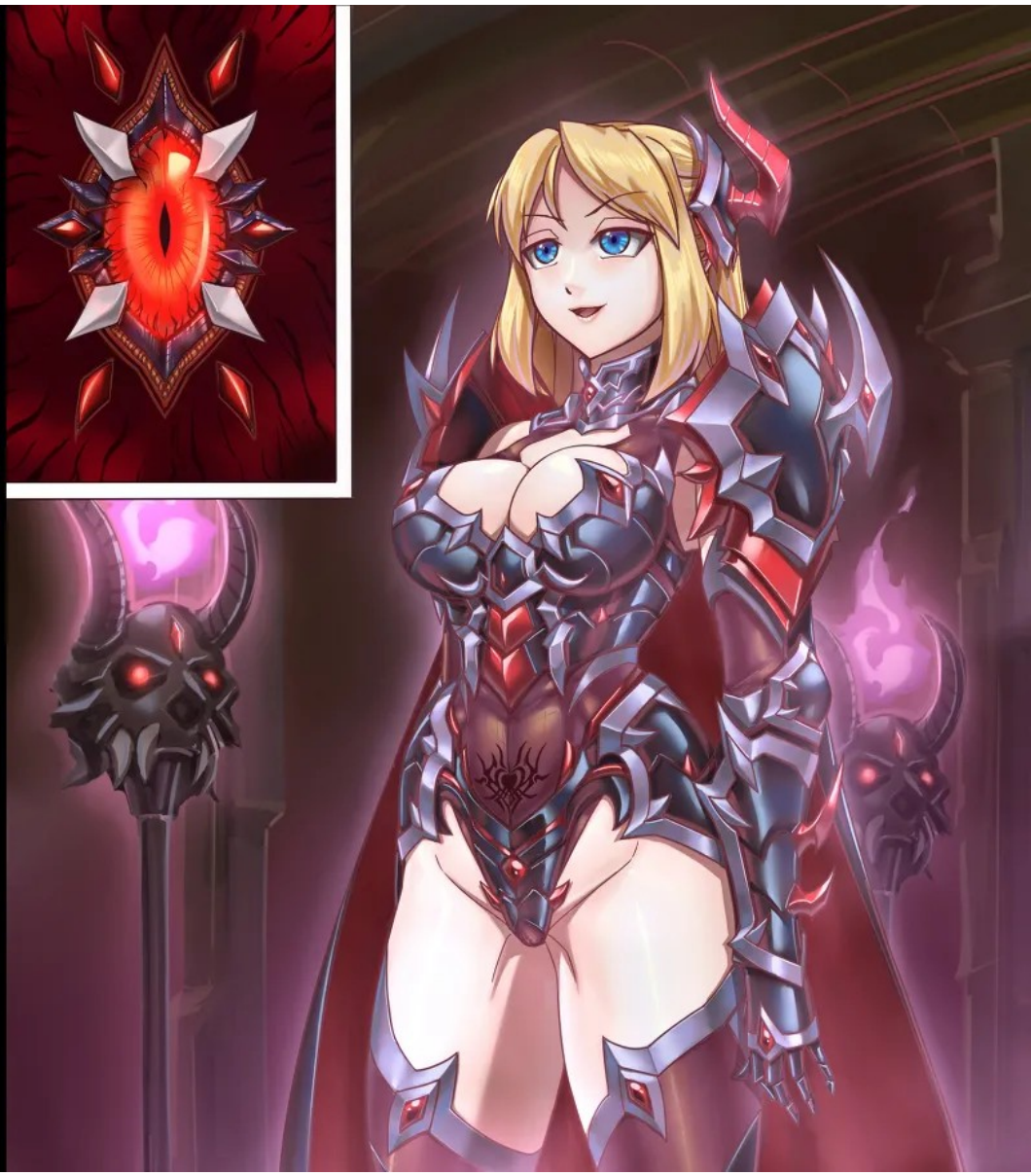
（…ダメ…これは彼の…術…）
「惜しな，お主のような人才、あの三流チームにいるなんで。」
「…違…か…う…」
「あんな三流の仲間はただお主の足を引っ張るだけよ。」
（ちが…でも…彼の言うは本当なら…）
「その仲間たちはお主を捨て，自分だけを逃げるんだ…」
「く……ー」
（わ…わたし何のために戦うの……）
「…その聖なるローブを脱ぎなさい。」
「…はい。」

（ああ…この感覚…心地よいです…）
「クク、魔力だけでなく、体の素質もよい。」
「…ありがとうございます。」
「わしに忠誠を誓えば、お主に相応しい力を与えてやろう。」
「…力は…弱い者を…守る…」
「この世界は弱肉強食、弱者に支配権利は強者当然のこと。」
「そしてお主は、その資格がある。」
（そ…そうよ…弱者を支配権利…私その資格がある……）
「その選べ！弱者のまま死ぬか？それともわしに誓い、強者になろうか？」
「…誓います。」



（ああ…！なに…これ！お腹とは燃えてしまう!!）
「この邪紋はお主の聖なる魔力を全て邪悪な魔力に変える！」
「…ら…らしゃ！」
「なぜ拒む？本当は気持ちいいだろう？」
（そ…そうね！凄く気持ちいいのに…欲しい！もっと欲しい!!）
「けけけ！そうだ。力を持つ、弱者を蹂躙のはそんなに気持ちいいだ！」
「その更に快感を求め!!お主の潜在魔力全部引き出すために！」

「…気持ちいいの…欲しい…もっと…もっともっともっと…」
「クク、想像以上の素質だ・さあわしのしもべとして生まれ変わろ…」
「イクうううう……」



「目を覚ませ、わしのしもべよ。」
「…はい、魔王様。」
「強者として生まれ変わったのはどんな気分?」
「素晴らしいです。邪悪な魔力は私の体中に流れて、いい気分です」
「その力あれば、私は…わたし……」
(あ…あれ、私なぜここにいったの……?)
「お主は力を求める、仲間を裏切り、わしの元へ来た、それだけだ。」

「ふふ…そうだ、私は力を求めるため、仲間を捨てる最低女です…」
「この力に比べれば、あの三流仲間たちは本当にゴミ以下のものよ。」
「ククッ丁度いい。偵査兵もうお主の元仲間を探した。」
「今はお主の力を示す時、さあ行け…」
「ええあの三流チームにいったは一生の恥、彼らを必ず抹殺する…」
「ふふふ…あはははは…」